

# 《展示した縄文遺跡》

**赤野井湾遺跡**  
あかのいわん  
 (守山市赤野井町ほか)  
 【早期～晩期】  
 早期の集石遺構や、魚の骨を廃棄した土坑など、縄文時代の調理の痕跡が多くみついている。

**穴太遺跡**  
あのを  
 (大津市穴太)  
 【後・晩期】  
 後期の集落跡が見つかった。樹木の根が腐らず残っていて、うっそうとした森林に囲まれて生活していた当時の様子が推測できる。

**栗津湖底遺跡**  
あわづこてい  
 (大津市晴嵐)  
 【早期～中期】  
 縄文時代中期の淡水貝塚や、早期のクリ塚が見つかった。貝塚に含まれる骨・貝殻などから、食生活の様子や生業、遺跡の周囲の環境について多くのことがわかっている。

**小川原遺跡**  
こがわら  
 (犬上郡甲良町小川原)  
 【後期～晩期】  
 西日本最大級の配石遺構群・配石墓群が見つかった。ハート形土偶も出土している。

**入江内湖遺跡**  
いりえないこ  
 (米原市入江)  
 【早期～後期】  
 丸木舟、骨角製の釣針、モリなどがみついている。縄文時代の漁や水上交通の手段を知ることができる。

**竜ヶ崎 A 遺跡**  
りゅうがさきえい  
 (近江八幡安土町下豊浦)  
 【早期～晩期】  
 中期の貯蔵穴(4基)が見ついている。貯蔵穴からは、東海地方から持ち込まれた土器も出土している。

**相谷熊原遺跡**  
あいだにくまはら  
 (東近江市永源寺相谷町熊原)  
 【草創期、晩期】  
 県内初となる草創期の竪穴住居が見つかる。土偶、有溝砥石、草創期に特有の形をした石鏃などが出土している。

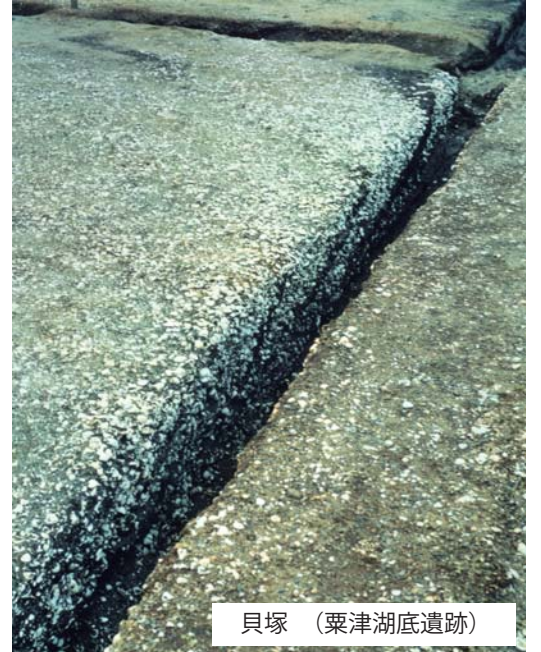
## 『縄文人が語るもの』 —モノから見た縄文時代の生活—

### はじめに

縄文時代は今から約 13,000 年～ 2,400 年前で、人々は狩猟・漁・採集を生活の基本としていました。今回は発掘調査の成果をもとに「食」「生業」「祈り」をテーマとして、縄文人の生活の様子についてまとめました。

### 食 貝塚とは？

貝塚は、捨てた貝殻を中心に、動物の骨や土器などが堆積した遺跡で、縄文人の食生活がよく分かります。栗津湖底遺跡では、日本最大の淡水貝塚が見ついています。貝塚に含まれている物の割合を重さで比べた場合、最も多かったのはセタシジミで、食生活の中心はセタシジミのように思われます。しかしカロリーに直すと、木の実(ドングリ、トチノキ、ヒシ)が 52.4%、セタシジミが 16.7%、魚(コイ、フナ、ナマズ)が 20.0%、スポンが 0.1%、イノシシやシカが 10.9%となっています。セタシジミの割合は以外と少なく、食料の中心は木の実だったようです。また、セタシジミの層と木の実の層が交互に重なっていることから、「主に貝や魚を食べる季節」・「主に木の実を食べる季節」があったようです。



貝塚 (栗津湖底遺跡)

### 食 どう調理したか？

縄文時代になると土器をつかって、煮炊きをするようになります。煮炊きした食物は腐りにくく保存しやすくなり、胃腸での消化を助けてくれます。また、土器に残った「オコゲ」から、何を調理していたのかわかる場合があります。竜ヶ崎 A 遺跡ではキビのオコゲが、入江内湖遺跡では球根のオコゲが、土器に付着していました。



深鉢土器 (赤野井湾遺跡)



炭化キビ付着土器 (竜ヶ崎 A 遺跡)

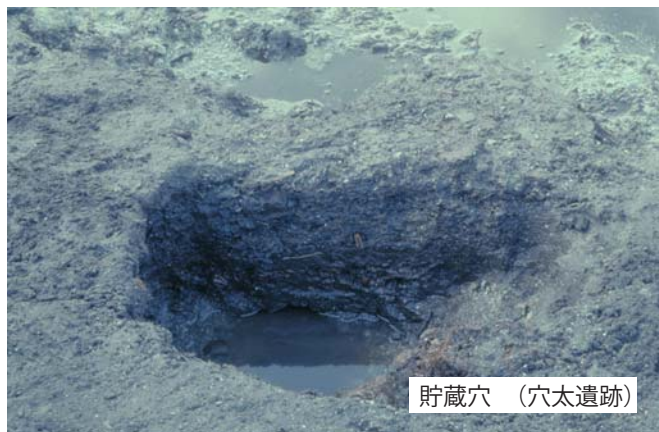


集石遺構 (赤野井湾遺跡)

赤野井湾遺跡で見つかった集石遺構からは、焼けた石や木炭の破片が見つかりました。これらの状況からこの遺構は石を使った調理の跡と考えられています。

## 食 保存の知恵

縄文人は地面に大きな穴を掘ってその中に収穫した木の実を保存しました。このような穴を貯蔵穴ちよぞうけつといいます。穴太遺跡では穴の中に木の実が残されたままのものがあり、貯蔵用の穴とわかりました。この穴は川岸につくられ、内部は木の実を層状に重ねて埋めていました。保存とともに水による殺虫ころしちゅうを目的とした工夫と考えられます。



貯蔵穴 (穴太遺跡)



丸木舟 (入江内湖遺跡)

## 生業 水辺の乗り物と移動

滋賀県では 29 隻の丸木舟まるきふねがこれまでにみつっています。入江内湖遺跡ではそのうちの5隻と櫂かいも出土しました。移動や漁に利用していたのでしょう。丸木舟を使うことで、湖の中での移動や、湖と川との行き来はより効率のよいものとなり、人々の生活は大きく変化しました。

## 生業 自然にあわせた生業

狩猟と採集は縄文時代の一般的な生業といわれますが、琵琶湖では「漁」が加わります。縄文時代の湖の周りの平野には、大小の河川が流れ、人が生活できるやや高い場所の周りには、湿地・湧水・小川・池・沼がモザイクのように点在していたと考えられています。

魚は成長・産卵のために湖とこうした湿地を行き来したり、湖の中を移動します。ビワマス、アコなどは川と湖を行き来し、コイ・フナやナマズなどは、深場から浅場のヨシ原などに集まります。このような魚の移動や集合に合わせて、網やモリを使って効率よくたくさん魚をとったのでしょう。赤野井湾遺跡などでは、網を沈めるための「石錘」が多く出土しています。



石錘 (赤野井湾遺跡・小川原遺跡)

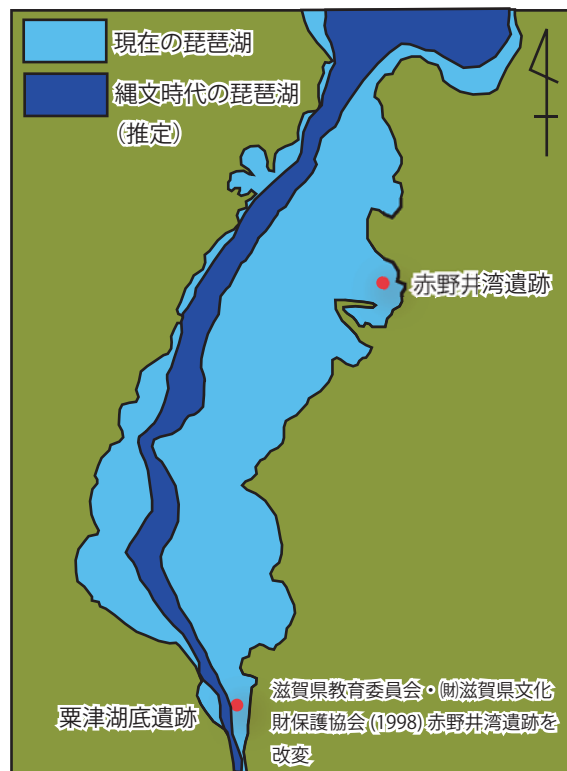


Copy right mana

## 生業 環境による魚の違い

現在見つけている貝塚の位置から、貝をたくさんとる漁は、現在の南湖でも瀬田川への出口ふきんでだけ行われていたと考えられています。

縄文時代の早期から中期(約 10000 年~約 5000 年前)にかけて、南湖の水面は現在より3から5mほど低かったことが、粟津湖底遺跡と赤野井湾遺跡の発掘調査からわかりました。水面が下がると、南湖は西にかたよる大きな川になります。貝の中でもセタシジミは、砂の川底を好んですみすから、この場所にはほかの場所よりも貝がたくさんいてとりやすかったのでしょう。魚だけではなく、貝をたくさんとる漁は琵琶湖では特異です。



釣り針 (入江内湖遺跡)

## 祈り 縄文人の墓

遺跡でみつかる遺体の埋葬方法には、棺を使わず穴に直接遺体を埋めるもの、土器を棺にして子どもの遺体や骨だけを納めるもの、遺体を埋めた後に石を並べるものなど、いくつかの方法があります。

右の写真は棺を使わない方法で、膝を折り曲げた姿勢で埋められた人の骨です。このような姿勢で埋める方法を「屈葬」といいます。穴太遺跡では穴から土器がみつかり、この土器は遺体を納めた棺と考えられています。土器を使った墓は「土器棺墓」といいます。小川原遺跡でみつかった墓には、遺体を埋めた穴の上に石を並べたものがあります。石を並べることから「配石墓」といいます。



配石遺構 (小川原遺跡)



屈葬人骨 (滋賀里遺跡)

## 祈り 祈りの道具

縄文時代の遺跡からは人々が祈りに用いた遺物が出土します。土偶は、人や動物を模した土製の道具で、縄文時代の草創期から晩期まで、ほぼ縄文時代を通じて作り続けられました。相谷熊原遺跡から出土した土偶は、縄文時代草創期のもので、日本全国の土偶の中でも最も古いものの1つとされています。土偶がほぼ全国各地から出土することから、縄文人は祈りに土偶を使う意識を共有していました。